

Giulio Maspero

Essere e relazione: l'ontologia trinitaria di Gregorio di Nissa

Collana di Teologia (diretta da Piero Coda) 79

Roma: Città Nuova Editrice, 2013, pp. 255,

ISBN 978-88-311-3384-5, A/5, €26,00.

秋 山 学

本書は、ニュッサのグレゴリオス（335-394）を中心とするギリシア教父学において、現在世界で最も優れた研究者の一人に数えられるジュリオ・マスペロ師による新著である。

以下、まず師の略歴と著作から紹介を始めたい。マスペロ師は1970年、イタリア北部コモ市の生まれである。同地で古典教育課程を終えた後（1989）、ミラノ国立大学にて物理学を修め、哲学博士号を取得しておられる（1998：学位論文『開放系における量子カオス』。師による物理学の事績は、G. Casati, D. Shepeliansky両氏らとの連名のかたちで国際的に引用される）。師はその後ローマの教皇庁立サンタ・クローチェ大学で神学基礎課程を終え（2000）、スペイン・パンプローナにあるナヴァラ大学に留学した。同地にて、ニュッサのグレゴリオス研究の第一人者マテオ・セコ（Lucas Francisco Mateo-Seco, 1936-2014）師の許で2003年に神学博士号を取得し、あわせて同年、オプス・デイ＝聖十字架司祭会の司祭に叙階されている。マテオ・セコ師は第6回国際ニュッサのグレゴリオス学会（1986）の主催者であったが、その一番弟子であるマスペロ師は、上述したサンタ・クローチェ大学での同第13回大会の開催責任者を務めることになった（2014年9月17～20日）。現在マスペロ師は、同大学神学部・教義神学講座の助教授（Professore straordinario）を務め、併せて学部長代理を兼任しておられる。また教皇庁神学アカデミー（PATH）の常任委員でもあり、名実ともにカトリック教義学を牽引する立場にある。

師は、伊語ばかりでなく、英語・西語その他の言語により極めて多くの研究を
発表している。2004年に伊語版で出版された『三位一体と人間：ニュッサのグ
レゴリオス「アブラビオスに宛てて」』は2007年に Brill 社より英語版で、また
マテオ・セコ師との共編になる『ニュッサのグレゴリオス事典』は2006年に西
語版、2007年に伊語版が出版され、Brill 社より2010年に英語版でも増補刊行さ
れている。この他、最近の師の活躍はますます盛んであり、『三位ゆえに一者：
神学序説』（2011年、単著）、『父ゆえに創造者：恩寵の存在論序説』（2012年、
Paul O'Callaghan師と共著）、『三位一体論神学再考：三位一体論神学の議論と現
代的諸問題』（2012年、R. J. Woźniak 師と共著）、『神秘に向けて開かれた窓：J.
ダニエルーの思想』（2012年、J. Lynch 師と共著）と続く。そして2013年に単
著として刊行されたのが本書『存在と関係：ニュッサのグレゴリオスの三位一体
論的存在論』である。師はそれ以降も精力的に研究発表を継続し、『一者にして
三位なる神の神秘：三位一体論神学ハンドブック』（2014年、Mateo-Seco 師と
共著；同師による西語原著〔2008年〕の伊訳増補版）のほか、教父学研究グル
ープ PATRES のメンバーとの共著『神の言葉と人間の言葉』（2014年、Angela
Maria Mazzanti ボローニャ大学教授編）に「人間と三位一体：ギリシアの靈魂
論的類比における言葉と関係（schesis）」と題する論文を、また翌年には同じく
PATRES による共著『古典世界と古代キリスト教の間の危機と刷新』（2015年）
に「異端と教義：出来事に直面した際の思想の危機」と題する論文を発表してお
られる。そして2016年春の同グループの大会では、「危機への応答としての形而
上学と教父の聖書釈義」という題目で口頭発表を行っておられた（ちなみに評者
は師の推挙により、2016年の同大会で発表する光栄に与った）。師は、一貫して
「関係」（relatio-schesis）をキーワードに、ニュッサのグレゴリオスの神学を三
位一体論的観点から深化させ、いまや独自の神学的境地を開拓しておられる。

本書は全9章より成っている。各章の章題は以下のとおりである。第1章「存
在の基盤」、第2章「ラチオとしてのロゴス」、第3章「関係（レラチオ）とし
てのロゴス」、第4章「生命に発する生命」、第5章「歴史における関係」、第6章
「認識と関係」、第7章「三位一体の文法」、第8章「三位一体から人間へ」、そし
て第9章「結論：第三の航海」である。言うまでもなく、結論部で示される「第
三の航海」とは、本著作が、プラトン『ファイドン』篇で語られる「第二の航
海」（100a）、すなわち（ロゴスを前提とした上での）「仮説演繹法」に続くもの

として意図されたことを表している（後述）。

第1章冒頭は、ソフォクレスの悲劇『アンティゴネ』に描かれるアンティゴネとハイモンの悲恋から説き起こされる。古代ギリシアの文脈では、個の絶対的な価値がいまだに認識されておらず、ソクラテスの死も同種の例と見なされる（8-9頁）。ただニュッサのグレゴリオスをはじめとする後4世紀の教父たちは、神との出会いを通じて人間に提示された（「存在」をめぐる）この現実を説明するため、ギリシアの形而上学を豊かに止揚させることに貢献した（10頁）。この文脈において、キリスト教思想における「新しさ」とは、絶対者である神が名前を有し、人間との関係性のうちに入り、人格者である、という点に求められる（11頁）。盛期教父時代のギリシア教父たちによるキリスト教教義の展開とは、まさしく関係性における新たな存在論の誕生の歴史として読み解くことができる。これは古代ギリシアの哲学が未踏であった領域に行くものである（15頁）。

20世紀の最後の30年間に現れた歴史的・教義学的研究は、師によれば二方向に分類することができる。まず一つは、西方的ないしアウグスティヌスの伝統に依るものであり、「関係」の概念をめぐる「実体」との関わりを探究するものである。これはJ.ラッツィンガー（退位教皇 Benedictus XVI 世, 1927-）をはじめ、トマス・アクィナス研究者たちにも見られるもので、W.ノリス・クラーク（Norris Clarke, 1915-2008）の研究がその代表として挙げられる。もう一方は東方ないしギリシア教父たちの伝承に遡り、人格（ペルソナ）の概念を追究するものである。その代表者としてはJ.ズィズィウラス（Zizioulas, ギリシア正教会ペルガモン府主教, 1931-; 『交わりとしての存在』1985年）が挙げられる（16頁）。著者は、J.ダニエルー（Daniélou, 1905-1974）による『三位一体と存在の神秘』（1968年, 伊訳1989年）が本書の着想を与えたと述懐し、哲学と自由を併置しつつ三位一体論的存在論の観点でニュッサのグレゴリオスを読み直す行為の有効性を示唆する（18頁）。そこでまず本書の第2章では「ロゴス」の歴史と、ギリシア世界を特徴づける宇宙論的概念史の通覧が行われる。小結として、古代ではロゴスが「関係」として捉えられ、三位一体論はそれを自由と相互の恩恵として再検証する必要があったとされる（第3章）。ニュッサのグレゴリオスにあっては「神の子化」の概念が基軸となっているが、そこには、ロゴスを神的内在性のうちに置く契機が見られる。その際に神名としての「生命」（ヨハネ14:6）がクローズアップされ、「永遠なる誕生」と不可分に結びついたことが

強調される（第4章）。この小結が、3人のカッパドキア教父たちに見られる schesis の用例に基づいて検証され、彼らの新しさが実証される（第5章）。

以上を前提として、次に、神的なるものと被造世界との関係というデリケートな問題に移行して探求が継続される。以下の章では順に、三位一体論の認識論的（第6章）、人間論的（第8章）、そしてそれらの中間の章では文法論的（第7章）な探求が行われる。第8章では、グレゴリオスがヨハネの神学に忠実であり、十字架を常に栄光との関係で理解していることが指摘される。キリストは、罪に刻印された人間が再生するために死ぬのとは異なり、自由選択意志に基づいて死ぬために生まれた。それはわれわれ人間が罪と死から救われるためであった（218頁）。そして同章の終節は「総括：マリア的存在論」と題され、マリアが父なる神にとって娘、キリストにとって母、聖霊にとって花嫁でありつつ自己同一性を有するという包摂的關係性が強調され、締め括られる（246頁）。

本書は何よりも、ニュッサのグレゴリオスによる古典ギリシア哲学の止揚の実態を、原典の豊富な引用を通じて明晰に立証した点で特筆される。著者によれば、プラトンによる「第二の航海」で仮説的に置かれていた「ロゴス」は、三位一体論的啓示という「神的ロゴス」によって提供された。この「第三の航海」は、ニュッサのグレゴリオスや4世紀の教父たちによって展開された存在論的拡充と、さらには、新約聖書の啓示から出発して現実を考えようとする試みと同一視される（241頁）。物理学者にして神学者である師の明晰な筆致を通して、読者は現在、ニュッサのグレゴリオス研究が教父神学の一大中心を成していることを実感できよう。緻密にしてスケールの大きな好著として広く推薦したい。